

『源氏物語』における二条院の物語的役割についての研究

——二条院に住んだ女君たちを比較して——

高山 智 江

一、はじめに

『源氏物語』にでてくる二条院という建物は、もともと桐壺更衣の実家であった。桐壺巻で桐壺更衣が亡くなった後、実子である光源氏がそこを受け継ぐことになる。しばらくして光源氏は、幼い紫上を二条院の西の対にさらい、そこに住まわせることにする。そして光源氏が須磨へ退去するのを機に、紫上は光源氏から二条院を譲られた。数年後、須磨から戻ってきた光源氏は紫上を連れて六条院に移る。しかし、晩年の紫上は再びこの二条院に戻ってきてきて病死した。紫上の死後は、明石姫君の子ともである匂宮が、紫上から二条院を譲り受けている。そして後に、匂宮に引き取られた宇治中君が、二条院の西の対に迎え入れられることとなった。

このように、二条院という建物は『源氏物語』の全編を通して、長きにわたり登場し続けている。六条院と共に『源氏

物語』における主要な邸宅の一つであると言える。しかし、二条院は六条院ほど『源氏物語』内で華々しく語られることはなく、二条院のみに注目して書かれた先行研究は少ない。その内容も、二条院が平安京のどこに位置しているのかを考察したもの（注1）や、庭の描写について考察したもの（注2）、二条院を含めた邸宅の伝領のされ方について考察したもの（注3）などが主である。

二条院は『源氏物語』の研究上重要視されてきたとは言いがたいが、そこに住んだ女君たちに注目していくと、ある物語的役割を担っていることが明らかになった。そこで、本稿では二条院に住む女君たちを比較することによって、『源氏物語』における二条院の役割を明らかにしていきたい。

二、女君たちの比較 桐壺更衣と紫上

まずは『源氏物語』の本文によって、桐壺更衣と紫上の人生を比較していきたい。

一番わかりやすい共通点として、二人の死後についてのとある場面があげられる。『源氏物語』には、登場人物の死の場面が数多く描かれている。その場面の数だけ死を悼む表現がなされているわけではあるが、「登場人物の死を車から落ちそうになるほど嘆き悲しむ」場面は、『源氏物語』の中には二つしかない。そしてその二つの場面が、桐壺更衣の死の場面と紫上の死の場面に該当するのである。

〈桐壺更衣〉

「灰になりたまはむを見たてまつりて、今は亡き人とひたぶるに思ひなりなん」とさかしうのたまひつれど、車よりも落ちぬべうまろびたまへば、さは思ひつかしと、人々もてわづらひきこゆ。（注4）

（桐壺①二五頁）

〔紫上〕

御送りの女房は、まして夢路にまどふ心地して、車よりもまろび落ちぬべきをぞ、もてあつかひける。

（御法④五一頁）

桐壺更衣が死んだ際、彼女の母親は車から落ちそうになるくらい嘆き悲しんだ。それを見ている女房たちは、「もてわづらひ」呆れた雰囲気である。しかし、桐壺更衣の死に対して冷静であったはずの女房たちは、紫上の死に対しては桐壺更衣の母親と同じように車から落ちそうになりながら嘆き悲しむのである。この物語内引用を見ても、紫上の死に桐壺更衣の死が意識されていることがわかる。

以下、二人の共通点をみていく。この二人の共通点は、二条院という場所で過すことから始まった。

二条院は桐壺更衣の実家である。一方で、紫上は母親の死後、北山の尼君に引き取られていた。しかし、彼女を養育していた尼君の死後、彼女は光源氏によって半ばさうように二条院に連れてこられ、二条院にて光源氏の手で養育されることになる。この二条院は、元々光源氏が理想の女性と住みたいと思っていた場所であった。

かかる所に、思ふやうならむ人を握ゑて住まばやとのみ、嘆かしう思しわたる。

（桐壺①五〇頁）

その頃、藤壺宮を相手に叶うことのない恋をしていた光源氏にとって、理想の人とはまさに藤壺宮のことであった。桐壺巻では漠然と「かかる所に、思ふやうならむ人を握ゑて住まばや」と思っていた光源氏だったが、次第にそのイメージが定まってくる。

ただひたぶるに兎めきてやはらかならむ人をとかくひきつくろひては、などか見ざらむ、心もとなくとも、直しどころある心地すべし。

（帚木①六四頁）

なかなかのさかしら心なく、うち語らひて心のままに教へ生ほし立てて見ばやと思す。

（若紫①二二三頁）

光源氏は幼く素直な人を思いどおりの妻に育て上げたいと思う。北山にて光源氏が垣間見た藤壺宮にそっくりで幼い紫上は、光源氏の理想にぴたりと当てはまる人物であつた。藤壺宮は桐壺帝によつて桐壺更衣のゆかりとして求められ、光源氏はその藤壺宮のゆかりとして紫上を求めた。同じ二条院に住んだ二人は、紫のゆかりとして繋がつていた。

二条院にて幼少期を過ごしていた二人は、途中で宮中・六条院へとそれぞれ語られる舞台を移していく。桐壺更衣は、亡き父親が残した遺言に従つて入内した。しっかりとした後見のいない状態は、桐壺帝から与えられた寵愛も相まって、大きな負担を桐壺更衣に与えた。しかし、最後まで彼女が父親の遺言に背くことはなかつた。

一方で、六条院とは光源氏が世話をしている女君たちを一カ所に集めようとして建てた邸宅である。紫上は光源氏に付き従つて、二条院から新しく造られたこの六条院へと移り住んだ。

このように、どちらも父・養父に従つて宮中・六条院へと向かうこととなつている。彼女たちの二条院から出るという選択に、自分の意志は存在していない。

次は、他の妻との関係について確認していく。

『源氏物語』の冒頭で描かれた緊張的状况は、桐壺帝の嫡妻といえる中宮の座が空席な中で、女御よりも下の地位にある更衣の女が帝からの寵愛を独占していることによつてつくりあげられている。桐壺帝の中宮になる可能性が一番高いのは弘徽殿女御であり、二人の間には既に皇子が生まれていた。しかし桐壺帝と桐壺更衣は、その弘徽殿女御を差し置いて何事にも行動を共にしていたのである。弘徽殿女御は、あまりにも桐壺帝が桐壺更衣を特別に扱うので、中宮と同様に空席となつている東宮の席も桐壺更衣が産んだ光源氏に取られてしまふのではないかと、より一層、桐壺更衣に対する嫌悪を強くしていくのである。

そんな桐壺更衣と同様に、紫上も夫の正妻にはなれなかつた女君である。紫上は『源氏物語』内において、光源氏と正

式な手順を踏まえた結婚をしていない。故に、正妻格などという言葉で彼女の立場は表現されるのだ。紫上は光源氏の正妻ではない。しかし、光源氏と紫上の二人も本文にて仲睦まじかったと若菜下巻にも書かれている。

年月経るままに、御仲いとうるはしく睦びきこえかはしたまひて、いささか飽かぬことなく、隔ても見えたまはぬものから、
(若菜下④一六七頁)

二人は夫の正妻にこそなれなかつたが、それ以上に夫から特別な扱いを受けていた。

また二人は、しっかりとした後見がおらず夫の寵愛に縋っているという点でも共通している。桐壺更衣の父親は『源氏物語』が始まったときには既に死んでいた。しっかりとした後見がないということは、すなわち、何かあつたときに頼る当てがないということである。桐壺更衣は、その寵愛が自らを追い詰めていることを分かつてはいながらも、桐壺帝から与えられる寵愛に縋るしかない状況にあつたのである。

いとほしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへのたぐひなきを頼みにてまじらひたまふ。
(桐壺①十八頁)

これは紫上も同様である。実父は健在であるものの継母からは疎まれ、実家は彼女の後見として機能しない。故に紫上は、自分には源氏しか頼れる人間がない。いま源氏から与えられている寵愛がとぎれてしまう前に、どうにか出家してしまいたいものだ、と、いつか光源氏からの寵愛が途切れてしまうことに不安を抱き、思い悩むのである。

対の上、かく年月にそへて方々にまさりたまふ御おほえに、わが身はただ一ところの御もてなしに人には劣らねど、あまり年つもりなば、その御心ばへもつひにおとろへなん、さらむ世を見はてぬさきに心と背きしがな、とたゆみなく思しわたれど、
(若菜下④一七七頁)

このように、二人にはしっかりとした後見がおらず、どんなに辛い境遇に身を置こうとも夫の寵愛に縋るしかない境遇にあつたのである。

先ほども述べたが、桐壺更衣は桐壺帝から与えられる身分に相応しくない寵愛を理由に、周りの人間から憎まれていた。何度も陰險な嫌がらせを受け、ひどく苦勞している様子が描かれている。桐壺更衣が病に伏したのも、常にこのような気の抜けない環境に身を置いていたことが原因の一端を担っている。

はじめより我はと思ひあがりたまへる御方々、めざましきものにおとしめそねみたまふ。同じほど、それより下臈の更衣たちはましてやすからず。

恨みを負ふつもりにやありけん、いとあつしくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、
(桐壺①十七頁)

そしてそれは紫上も同様で、女三宮より地位の低い彼女に向けられる光源氏の愛情がいきすぎたものであるとして、女三宮の世話役や彼女に恋する柏木などから、紫上ばかりにかまけて女三宮が不当に扱われている、などと評価されている場面がある。

「対の上の御けはひには、なほ庄されたまひてなむ」と、世人もまねび伝ふるを聞きては、かたじけなくとも、さるものは思はせてまつらざらまし、
(若菜上④一三六頁)

また紫上が死んだなどと噂が流れたときには、周囲の人間を苦しめる存在だと世間の人から冷たく噂されている場面がある。

「かく足らひぬる人はかならずえ長からぬことなり。『何を桜に』といふ古言もあるは。かかる人のいとど世にながらへて、世の樂しびを尽くさば、かたはらの人苦しからん。今こそ、一品の宮は、もとの御おほえあらはれたまはめ。いとほしげにおされたりつる御おほえを」など、うちささめきけり」
(若菜下④三三八頁)

このように、二人は高位の女君を差し置いて身分に相応しくない寵愛を受けていることを理由に、周囲の人や世間の人に悪い噂をされることとなった。

そんな度重なる嫌がらせに心労が溜まった桐壺更衣は、ついに病氣にかかってしまう。そして死ぬまでの間、何度も療養のために二条院に下がることとなった。

恨みを負ふつもりにやありけん、いとあつしくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、

(桐壺①十七頁)

紫上も、光源氏との関係を絶えず悩み続けることで心労がたまり、ついには病氣にかかってしまった。

げに、のたまひつるやうに、人よりことなる宿世もありける身ながら、人の忍びがたく飽かぬことにするもの思ひ離れぬ身にてややみなむとすらん、あぢきなくもあるものかな、などと思ひつづけて、夜更けて大殿籠ぬる暁方より、御胸をなやみたまふ。

(若菜下④二二二頁)

二人の心労の原因には、夫との関係がある。

桐壺帝は最初、桐壺更衣の体調不良はよくあることとして二条院に下がることを拒んでいた。しかし桐壺更衣の容態が悪化の一途を辿ったため、しぶしぶ二条院へと下がることを許可した。

紫上は、病が一向に回復の兆しを見せないために、光源氏によつて六条院から二条院へと移された。

同じさまにて、二月も過ぎぬ。言う限りなく思し嘆きて、こころみに所を変へたまはむとて、二条院に渡したてまつりたまひつ。

(若菜下④二二四頁)

二条院から出るのも二条院に戻るのも、彼女たちは自分の意志では行えない。こうして二条院から出て行った二人は、同じような理由で病に倒れ、二条院へと帰ってきた。

また、二人は同じ二条院で死んでいる。宮中は神聖な場所であり、死の穢れを持ち込むわけにはいかない場所であった。故に桐壺帝は、しぶしぶ桐壺更衣の里下がりを許したのだ。他に行く当てのない桐壺更衣が、実家である二条院にて亡くなることはおかしなことではない。

一方で、六条院は宮中ではないのだから紫上は六条院で死んでも問題はなかったはずである。しかし、紫上も桐壺更衣と同様に、夜明け前に二条院にて亡くなったのだった。

紫上の二条院への移動は、後におこる柏木密通事件の為に六条院に人目のない状況をつくろうとしたことが主な理由だとされている。しかし、それだけが理由ではないと考える。紫上が二条院へと移ったのは、桐壺更衣と紫上の二人を同じ場所で死なせるためでもあったのではないだろうか。

桐壺更衣の死後、二条院は桐壺帝によって改築され、光源氏へと譲られた。

内裏には、もとの淑景舎を御曹司にて、母御息所の御方の人々まで散らずさぶらはせたまふ。里の殿は、修理職、内匠寮に宣旨下り、二なう改め造らせたまふ。
(桐壺①五〇頁)

紫上は亡くなる少し前、自分になついてくれていた匂宮に二条院を譲った。

「大人になりたまひなば、ここに住みたまひて、この対の前なる紅梅と桜とは、花のをりをりに心をとどめてもて遊びたまへ。さるべからむをりは、仏にも奉りたまへ」
(御法④五〇三頁)

紫の上の御心寄せことにはごくみきこえたまひしゆゑ、三の宮は二条院におはします。
(匂兵部卿⑤十七頁)

桐壺更衣は実子である光源氏に、紫上は自分の子どものように可愛がっていた匂宮にそれぞれ二条院を譲った。このように、二条院は『源氏物語』の主な登場人物に伝領され続け、表舞台から消えることなく、そこで繰り広げられる物語は語られ続けたのである。

三、二条院物語

以上のことから、桐壺更衣と紫上の生涯には、多くの共通点があるということがわかる。二条院から始まり二条院にて終わった二人の人生は、多くの共通点を持っていた。藤壺宮を通して繋がっているとされていた二人は、二条院という場所を通して繋がっていたのである。

光源氏は、本文にも明記されている通り、藤壺宮のような人と住みたいと思ひ願つて、紫上を二条院に連れてきています。つまり、紫上は藤壺宮のゆかりとして光源氏に求められていたのである。藤壺宮は桐壺更衣のゆかりとされ、紫上は藤壺宮のゆかりとされていた。そんな紫上の人生はゆかりである藤壺宮ではなく、何故か桐壺更衣の人生と酷似する。桐壺更衣と藤壺宮を介した紫のゆかりで繋がっていた紫上を二条院に引き取ったという事実があるだけに、二人の間に運命の回帰のようなものがおきたのだろうか。

光源氏が自分で女君たちを呼び集め、思うようにつくりあげた六条院とは違い、二条院に光源氏の意思はない。そうであるにも関わらず、そこに住んでいた女君にここまでつながりがあるということは、二人が住んだ二条院には、何か『源氏物語』における重要な意味が与えられていると考えられる。

『源氏物語』における研究で、六条院を舞台に展開する物語を「六条院物語」と呼称することがあるが、同じくこの二条院を舞台に展開する「二条院物語」なるものがあるとすれば、二人はその主人公とも言えるだろう。実子へ、妾妻へ、自分の子供のように可愛がっていた相手へと伝領され続けたこの場所を舞台に、『源氏物語』の正編で「二条院物語」は二度語られる。しかしその大筋は変わらず、主人公を変えてほとんど同じ話が繰り返されているのだ。二人の「二条院物語」はどこにもいけないまま、同じような流れを繰り返している。そんな繰り返された「二条院物語」を踏襲しつつ終わ

らせることのできる存在が、『源氏物語』の続編に登場した宇治中君であると考ええる。

四、女君たちの比較 宇治中君と紫上

『源氏物語』において二条院に住んだ女君は、桐壺更衣と紫上だけではない。「二条院物語」の主人公たりえる女君は、もう一人いた。それが宇治中君である。『源氏物語』の正編が終了した後、紫上から二条院を譲られた匂宮が、宇治中君を宇治の山奥から二条院へと連れてきているのである。匂宮は、光源氏と紫上の関係に憧れた。そしてその憧れは、彼が二条院に引き取った宇治中君によって叶えられたのである。宇治中君の「二条院物語」も、紫上と同様に夫となる人物から二条院に引き取られたことより始まった。

宇治中君が二条院に住むことになったのは、匂宮がなかなか宇治にまで気軽に通うことができない身分であることが原因であった。薫君のたてた計画の通り、匂宮は無理を押し三日間宇治に通いきり、宇治中君との結婚を果たす。しかし彼は、宇治に頻繁に通うことの出来るような身分ではない。匂宮は繰り返される夜遊びを明石中宮から諫められ、京から軽率に出ることができなくなってしまう。加えて六君との結婚も進められることになる。この噂を耳にした宇治大君は、妹の行く末に心を痛めて病にかかり、死亡してしまう。宇治大君の死後、匂宮は明石中宮の許しを取り付けて、宇治中君を京に引き取る決意を固めた。匂宮は彼女を自らの手元に置いておくために、二条院につれて来たのである。

ここで、宇治中君が他でもない紫上と同じ二条院の西の対に住んでいることに注目したい。

二条院の西の対に渡いたまひて、時々も通ひたまふべく、

(総角⑤三四〇頁)

宇治中君を京に引き取ろうとした匂宮に、引き取る場所として二条院の西の対を提案したのは明石中宮であった。紫上

の死を看取った彼女の言葉がきっかけで、宇治中君は紫上と同じ二条院の西の対に住み、紫上と同じ「対の御方」と呼ばれることになるのである。この西の対とは、『源氏物語』の中でどのような場所として描かれていたのだろうか。森多佳江氏（注5）は『伊勢物語』『狭衣物語』『落窪物語』などの例を挙げて、実子が養子かを問わず、対の屋には娘を住ませる風習があったとした。また、『源氏物語』の中では側室クラスの女性が対の屋に住まわされていたとしている。それから、

こうなると新たに疑問となるのは、紫上が対の屋に住まわされている、という一件だろう。紫の上が正妻か側室かは難しいところで、だからこそ正妻格などという奇妙な用語が使われている。（中略）実際に「真木柱」巻や「若菜上」巻では、「北の方」「北の政所」などとも呼ばれているし、「藤裏葉」巻の明石の姫君の春宮入内に関しては、その母君として「女御」に准ずる待遇を受けた紫の上が正妻の扱いでなかったことはありえない。（中略）紫の上は『源氏物語』中、対の屋に住みながら正妻と呼ばれる数少ない女性といえるわけである。同じような境遇の女性に宇治中の君がいる。この中の君は匂宮のものとなった二条院の西の対に住んでいるが、「宮の北の方」（東屋）（⑥三九頁）、「兵部卿の北の方」（宿木）（⑤四五六頁）、「手習」（⑥三五八頁）、「宮の御二条の北の方」（蜻蛉）（⑥二五七頁）と繰り返して、北の方と呼ばれている。

とも述べている。『源氏物語』内において、対の屋は側室が住む場所として描かれた。事実、光源氏にも匂宮にも正妻は他におり、二人はあくまで側室の域をでない。しかし二人は、正妻を表す「北の方」という呼称で度々呼ばれるほど、夫から特別な扱いを受けていた。このような例は、『源氏物語』内では紫上と宇治中君以外の女君には見られない。二条院の西の対とは、側室ながら正妻並みに夫に寵愛される女君の住んだ場所として、『源氏物語』で描かれているのである。明石中宮は、夕霧の娘である六君と匂宮の結婚を後押ししている立場として、匂宮に宇治中君を正妻として京に迎える準

備をさせるわけにはいかなかった。しかし信頼している薫君が宇治大君の死にひどく嘆き悲しんでいることを知り、その妹である宇治中君も素晴らしい女性なのだろうと考えを改めて、彼女を京に引き取ることを許可する。だが、後見のいない彼女に匂宮の正妻の座を与えるわけにはいかない。その為、育ての母である紫上が住んでいた二条院の西の対を匂宮にすすめたのだ。それはつまり、光源氏が紫上にしてきたように、匂宮が宇治中君を特別扱いすることを許したということではないだろうか。

『源氏物語』において、光源氏の正妻と呼べる女君は二人いた。それが葵上と女三宮である。どちらも後見の持つ権力は紫上より強い。葵上とは、光源氏が元服して直ぐに結婚した。二人の結婚は恋愛の末の結婚ではなく、親同士がかつてに決めた結婚であった。二人は歳も離れており、光源氏はなかなか仲を深めることが出来ないでいる。そんな折りに光源氏は若き紫上と出会ってしまった。葵上を放置して二条院に彼女を引き取るのである。

匂宮は宇治中君を二条院に迎える前から、夕霧より六君との縁談を持ちかけられていた。しかし匂宮は政治的思考が見え透いたこの結婚に、なかなか乗り気にはなれない。故に、匂宮は六君との結婚よりも宇治中君を二条院に引き取ることが優先し、夕霧に恨まれるのを覚悟の上で、六君との結婚前に彼女の引き取りを強行する。光源氏が葵上を疎ましがっていたように、匂宮も六君との結婚を疎ましがっていたのである。

しかしその後、匂宮は周囲のすすめを断りきれず六君と結婚することになる。この場面を細かく見ていくと、光源氏と女三宮の間でも同じ流れが存在することがわかる。光源氏をはじめ、女三宮の降嫁を断っていた。しかし病気の朱雀院の言葉に断りきれずに結婚することとなるのだ。その結婚が発覚した際に、女君側が如何にも気にしていませんよといった態度を取りながらも、自らの人生について思い悩む場面があるのも全く同じである。

〈紫上〉

堰かるべき方なきものから、をこがましく思ひむすほほるるさま世人に漏りきこえじ、

(若菜上④五三頁)

〈宇治中君〉

何かは、かひなきものから、かかる気色をも見えたてまつらんと忍びかへして、聞きも入れぬさまにて過ぐしたまふ。

(宿木⑤三八四頁)

そしてその悩みに対して、この心に変わりはないのだからと夫側が思うのも同じ展開である。

〈光源氏〉

いとほしく、このことをいかに思さむ、わが心はつゆも変わるまじく、さることあらんにつけては、なかなかいとど深
さこそまさらめ、見定めたまはざらむほど、いかに思ひ疑ひたまはむ、など、やすからず思さる。(若菜上④五一頁)

〈匂宮〉

何かは、常よりも、あはれになつかしく、起き臥し語らひ契りつつ、この世のみならず、長きことをのみぞ頼めきこ
えたまふ。(宿木⑤三八五頁)

このように夫の正妻が自分より身分が高いことから、二人は、自らの取るに足りない身の上を自覚し、思い悩むのであ
る。

匂宮と宇治八宮の遺子である宇治中君では、身分が違いすぎた。宇治中君程度の女性は、匂宮の身分ならば女房のよう
に扱って身の周りの世話をさせたとしてもおかしくはなかったのである。事実、明石中宮は匂宮にそのようなことを仄め
かしている場面がある。

なべてに思す人の際は、宮仕の筋にて、なかなか心やすげなり、

(総角⑤二九〇頁)

女一の宮の御方にこと寄せて思しなるにやと思しながら、

(総角⑤三四〇頁)

しかし、匂宮は宇治中君に対してそのような扱いはしなかった。また宇治大君が亡くなった今、宇治中君を諦めきれない薫君ですら二人の仲を認めている。匂宮の行動としても、宇治中君を二条院に迎えて直ぐは、宮中に出仕しても出来るだけ泊まり込むことをせず、宇治中君の元へ帰っている。宇治中君も夫の正妻にはなれなかったが、夫とは仲睦まじかった。

宇治中君の母親は、橋姫巻の中で、宇治中君を産んで直ぐに死亡したと語られている。父親である宇治八宮は権本巻で死亡しており、姉の宇治大君も総角巻で死亡している。薫君は、亡き宇治八宮と宇治大君より宇治中君の世話を頼まれていたが、その役割は夫である匂宮が果たすこととなった。宇治中君にも他に頼りになる後見がなく、匂宮の愛を頼りに二条院で過ごしていたのである。

以上が、紫上と宇治中君の共通点となる。『源氏物語』内で宇治中君は亡くなっていないので、後半の内容が共通することは無い。しかし、彼女の立場の不安定さ、幸せなように見えて辛い思いをする夫婦生活は、見事に共通している。

こうして紫上の人生をなぞるように展開される宇治中君の人生であるが、全く同じというわけではない。宇治中君は夫との間に子どもを授かっているのである。これが一番大きな紫上との相違点になるだろう。紫上は光源氏に子どもを望まれているながら、彼との間に子どもをなすことができなかった。その結果、彼女は愛する人と別の女の間に生まれた子どもを育てさせられるのである。

しかし、宇治中君は匂宮が六君と結婚する前に妊娠し、彼が六君と結婚して暫くしてから男児を出産した。匂宮も跡継ぎが生まれたことを喜んでいる。

からうじて、その暁に、男にて生まれたまへるを、宮もいとかひありてうれしく思したり。

(宿木⑤四七二頁)

紫上は子どもに恵まれず、自分ではない女と愛する人の間に生まれた子どもを育てることになった。一方で宇治中君は、

二条院にて愛する人との間に子どもをもうけて育てるのである。それは、同じ「二条院物語」の主人公であつた紫上がで
きなかつたことであつた。

また、物語の途中から二条院につれてこられた紫上と宇治中君だつたが、宇治中君が二条院から出ることはない。匂宮
が六君と結婚することが分かつたとき、宇治中君は宇治に帰りたいと願つた。自分よりも身分の高い六君との結婚に心を
痛め、亡き父親の遺言を違えてまで匂宮を頼りに宇治を出したのはやはり間違ひだつたのだと、自分の行動を心の底から後
悔する。そして六君との結婚から夜離れが続く匂宮に対し、あまりに思い詰めた彼女は、とうとう薫君に宇治に帰るのを
手伝つてほしいと願う。

しかし、それでも彼女が二条院をでることはなかつた。桐壺更衣と紫上が二条院を出た先で、同じような経緯を辿つて
病にかかり、結局二条院に戻つてきたのとは大きく異なる。宇治中君は一貫して「二条院物語」の主人公であつたのであ
る。

五、女君たちの比較 宇治中君と桐壺更衣

匂宮は、自分も光源氏と同じようなことをしてみたいと思ひ、宇治中君を二条院に迎えている。故に、宇治中君の生涯
が紫上のそれと似ていてもそうおかしなことではない。では、桐壺更衣の生涯とはどうであろうか。

紫上との共通点は、先述の通り、桐壺更衣との共通点ともなり得る。しかしこの二人には、紫上には当てはまらない大
きな共通点が存在した。それが実子の存在である。子どもの誕生が祝福されたかどうかという点では相違するが、二人は
愛する人との間に子どもをもうけていた。

桐壺更衣が光源氏を産んだとき、既に桐壺帝と弘徽殿女御の間には皇子が生まれていた。その為、光源氏の誕生は一部から激しく疎ましがられてしまう。

しかし、宇治中君の産んだ子どもは明石中宮を含めた多くの人から祝福された。

後の宮よりも御とぶらひあり。

(宿木⑤四七〇頁)

七日の夜は、後の宮の御産養なれば、参りたまふ人々多かり。

(宿木⑤四七三頁)

匂宮と宇治中君の間に子どもが生まれた段階で、匂宮と六君の間に子どもはいない。また『源氏物語』が終わるまでに、六君が妊娠する様子も描かれていない。つまり宇治中君の産んだ子どもは、匂宮の唯一の子ともとなる。

この子どもの有無は、先ほど比較した桐壺更衣と紫上との相違点にもなる。しかし、桐壺更衣は実子を産んだものの自らの手で育てることができずに死亡し、紫上は実子を産めずに愛する人と他人の間にできた子どもを育てさせられた。愛する人と自分との間に子どもをもうけ、自分の手で育てあげるといふ完全な母になれなかったという点では、桐壺更衣と紫上は共通するのである。

桐壺更衣と宇治中君に子どもがいることは確かな共通点であるが、それでは、子どもの将来についてはどうだろうか。

光源氏は、桐壺帝によって臣下の地位に下ろされた。桐壺巻での高麗人の観相のこともある。また、しっかりとした後見のない彼が、政治争いに巻き込まれて不幸になることを桐壺帝は心配したのだ。故に彼の人生は、帝になれる可能性を排斥された状態から語られた。優れた容貌や才能など、多くを与えられた光源氏だったが、皇位に関してだけは喪失からの出発をしているのである。

一方で、匂宮の若君はどうか。父親の匂宮は三宮である。彼が東宮になれる可能性はそう高くない。しかし本文を見ると、彼には滅多にない特別な措置が、父親である今上帝と母親である明石中宮から与えられようとしていることがわかる。

もし世の中移りて、帝、後の思しおきつるままにもおはしまさば、人より高ささまにこそなさめなど、

(総角⑤二九〇頁)

筋ことに思ひきこえたまへるに。軽びたるやうに人の聞こゆべかめるも、いとなむ口惜しき」と、(総角⑤三〇三頁)
たはやすく言出づべきことにもあらねば、命のみこそ」などのたまふほどに、

(宿木⑤四一〇頁)

まして、これは、思ひおきてきこゆることもかなはば、あまたもさぶらはむになどかあらん」など、

(宿木⑤三八一頁)

宮たちと聞こゆる中にも、筋ことに世人思ひきこえたれば、幾人も幾人もえたまはんことも、もどきあるまじければ、

(宿木⑤四一一頁)

この特別な措置の内容は、正確には明かされない。順当にいけば、二宮が次の東宮に選ばれるだろう。しかし、明石中宮の言う特別な措置の内容が明らかになつていない以上、三宮である匂宮が選ばれる可能性も低くはないはずである。それどころか、匂宮の立場が常に匂わされ、本文にて積極的に言及されていることを考えると、寧ろ高いのではないだろうか。匂宮は東宮となれるのだろうか。この問題について桜井宏徳氏(注6)は、宇治十帖に出てくる中務宮が匂宮の兄の二宮であるとする立場から、

二の宮にせよ匂宮にせよ、あくまでも東宮候補なのであって、次期東宮の座がどちらかに確約されているわけではない以上、いずれ劣らぬ二人の有力な「坊がね」が並び立っていると見ることは、けつして不自然ではあるまい。もとより、本来ならば第一皇子の東宮に続いて立坊するのは二の宮のはずであり、それにもかかわらず、匂宮までもが東宮候補とされているのは、助川幸逸郎や袴田光康によって示唆的に論じられているように、匂宮が紫の上鍾愛の皇子であったことよつて特別視され、卓越した存在として描かれていることの証左であろう。

と述べている。残念ながら『源氏物語』は二宮も匂宮も立坊しないまま終わるため、眞実はわからない。東宮には二宮がなるかもしれないし、匂宮がなるかもしれない。しかし、『源氏物語』の本文が、匂宮に与えられようとしている特別な措置について度々触れている以上、その可能性は十分にあると考えていいだろう。

では、宇治中君の産んだ子どもが帝になる可能性についてはどうだろうか。この問題について堀江マサ子氏（注7）は、『源氏物語』正編と『うつほ物語』で語られる出産の描写を比較して、

五人の出産の中で注目されるのは、冷泉帝の出産が「二月十余日のほど」と明石の姫君の誕生が十六日（三月）と日付が明記されていることである。いずれ二人は、天皇と中宮にそれぞれなるのであるが、それが予測される日付表現とも解釈できる。なお、「うつほ物語」では、物語の展開の担い手たちとなる登場人物の出産日は明記されており、東宮となった若宮も、「十月ついたちに、男宮生まれ給ひぬ。（あて宮「370）」と、誕生の月日が記されている。他の皇子の出産、梨壺の三の宮出産（「国譲上」689）やあて宮の二の宮出産（「あて宮」373）、四の宮出産（「国譲中」692）の日付は明記されていない。（中略）物語の中心になる人物の誕生は、明確な時間が付せられる傾向はある。（中略）実は、東宮になることは、出生のその時から明確な月日表現によって約束されていたと解釈できる。（中略）『源氏物語』や『うつほ物語』の出産の日付表現から、中君の出産した皇子は、次の物語の担い手になるかもしれない。謎解きの必然性のない中君の懐妊や出産の日付表現は、いずれ中君が国母となることを予測させる。

と述べている。

つまり、桐壺更衣が産んだ光源氏とは異なり、匂宮と匂宮の若君にはその可能性が十分に残されたまま、物語は展開していくのである。

六、二条院の物語的役割

以上が、二条院に住んだ三人の女君、桐壺更衣と紫上と宇治中君をそれぞれ比較していった結果である。『源氏物語』の正編にて語られた「二条院物語」は、桐壺更衣と紫上の二人を主人公として、似たような大枠の物語を繰り返した。二度繰り返された「二条院物語」は、三度目に至ってようやく異なる展開を見せた。それが、宇治中君の産んだ皇子の存在である。桐壺更衣は、亡き父からの期待に応え皇子を産んだものの、その子どもである光源氏は帝になれる可能性を排斥されてしまった。紫上は、光源氏から望まれていたが子どもが出来ず、他の女との間に生まれた子どもを皇后となれるよう育てあげることとなった。同じような物語を繰り返した二人は、どこかしらが母として欠けていた。そんな国母にはなりえなかった二人の物語の完結を予感させるように、宇治中君の物語は語られる。

宇治十帖の後半は浮舟が主役となるため、宇治中君について語られることは少なくなる。それに比例して、二条院について語られることも減ってしまった。故に、「二条院物語」の主人公である宇治中君がその後どうなったのかは分からない。しかし、それでも問題はないのだ。「二条院物語」は、彼女の産んだ子どもが帝になれる可能性を有している時点で、大団円を迎えているのである。可能性が摘まれることなく提示され続けている時点で、「二条院物語」が他に語ることはもう何もない。

『源氏物語』を研究する中で六条院を舞台に展開される「六条院物語」は「子」の物語だとする意見がある。それならば、『源氏物語』の中で語られた桐壺更衣、紫上、宇治中君の三人を主人公とした「二条院物語」は、「母」の物語であった。桐壺更衣は実子を育て上げる暇なく死に、紫上は子どもを産めず他人の子どもを育て上げた。子どもを育てられなかった母、子どもを産めなかった母。二条院に住んだ女君たちのそんな未練を、幸せに成就するべく登場したのが宇治中君なの

だ。二条院という場所は、「母」の物語を紡ぐ舞台という役割を持って『源氏物語』の中にあつたのである。

【注】

- 1 森本茂「源氏物語の「二条院」の位置」〔奈良大学紀要〕第十五号 一九八六年十二月
- 2 河原武敏「『源氏物語』二条院その他の庭園描写 古典文学の庭園描写に関する研究（4）」〔造園雑誌〕第五〇巻 二号 一九八六年十二月
- 3 高橋和夫「『源氏物語』に見られる邸宅とその伝領について——二条院と六条院——」〔風俗…日本風俗史学会会誌〕第二三巻二号 一九八四年六月
- 4 『新編日本古典文学全集 源氏物語』①⑤（小学館 一九九四～一九九八年）以下、『源氏物語』の引用はこれによる。
- 5 森多佳江「紫の上と西の対」〔日本文学論究〕第七十冊 二〇一一年三月
- 6 桜井宏徳「宇治十帖の中務官——今上帝の皇子たちの任官をめぐって——」〔中古文学〕九十三号 二〇一四年五月
- 7 堀江マサ子「宇治十帖」中君の時間——宇治から都の論理へ——」〔フェリス女学院大学日文学院紀要〕十七号 二〇一〇年三月